



Title	十六世紀日欧地図交流史に関する二・三の考察
Author(s)	高橋, 正
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1985, 19, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56460
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

十六世紀日欧地図交流史に関する二・三の考察

高橋 正

はじめに

ある文明が他の地に及ぶ際、それがいかに強い影響力をもつものであれ、一方的に与えるだけということは皆無といってよいであろう。まして早くから独自の文明を形成してきたわが国へ他の文明が及んだ場合、必ずやこれと逆方向の文明の流れの存することは当然予想されるところであり、筆者が最も関心を抱いている地図に関してもこのことは例外ではない。

この事実を近世初頭の日本全図について明らかにしようとしたのが「西漸せる初期日本図について」と題した拙論（『日本学報』第四号 一九八五）である。その際論じ尽せなかった点についてここに補うことにしたい。

一

わが国において日本人により作成され日本全図がヨーロッパ人の手に渡る以前に、中国人等の近隣諸民族によつ

て写された日本図が彼等の手に及んだ事実もあったものと思われる。海野一隆教授はガスタルデイ型日本図の成立に『登壇必究』所載日本図の影響の存することを主張するが、この図が行基図に基づくものとすればその好例であるといえよう。

このような間接的な交流の例はさておき、日本人の手により日本全図が直接ヨーロッパ人の手の内にもたらされた例として次の二つがあげられる。一つはフィレンツェ国立文書館所蔵の行基図式日本図であるが、この図そのものは筆写の字体や都市の描法からみてヨーロッパ人の手により写された図と考えられる。第二はマドリード国立史料館所蔵の行基図式日本図で一五八七年平戸からマニラに渡った十一人の日本人キリシタンが同地の司教ドミンゴ・サラザール氏に描き与えたもので、ガブリエルと署名した長野与右衛門の手になるものとされている。

これらのヨーロッパに現存する行基図がヨーロッパ人作成の地図にいかなる影響を与えたかは知られていない。かつてクリノ氏はフィレンツェの行基図がルイス・テイシエイラの日本図（一五九五）に影響を与えたと主張したが、この図に影響を与えた行基図としては別に唐招提寺所蔵「南瞻部洲大日本国正統図」の系統の図であることが⁽²⁾芦田伊人氏により指摘されている。⁽³⁾

しかし、行基図の影響が明らかに認められるヨーロッパ人作成日本図はテイシエイラ図ばかりではない。例えば筆者が前稿（以下本稿でいう前稿とはすべて前掲『日本学報』所載拙論）で検討した、天理図書館所蔵「イタリア古写日本図」（以下「イタリア古写図」と略記）に影響を与えた行基図は、テイシエイラ図の典拠となつたそれとは別系統の行基図であつたというのが筆者の主張であり、この点からしても「イタリア古写図」の系統に属するヨーロッパ人作成日本図（筆者のいうモレイラ系諸図）⁽⁴⁾をテイシエイラ型に属せしめるコルテザン氏の類型論には従う

ことができない。仮にその類型論を一六〇〇年以前に限って論じるとしても「イタリア古写図」の原図の成立年代がモレイラ在日期间を含む一五九〇年代であることを主張する筆者にとってみれば同じことである。

いま、ティシェイラ図の基図(A)としての行基図と「イタリア古写図」の基図(B)としてのその顕著な相違点を指摘すると次のごとくである。

- ① Aには伊勢湾口に志摩が島嶼として描かれているが、Bにはこれを島としては示していない。
- ② Aには三河沖に見付島があるが、Bにはこれが示されていない。
- ③ Aには日本海の若狭沖に島嶼があるが、Bにはこれが示されていない。

以上の諸点はいずれも行基図を筆写する際に改変されるものとは考え難い形態素であるが、ティシェイラ図で佐渡と止々島との地名が取り違えられ逆に示されているのは、Aによるものというより行基図を転写する際に生じた過誤と思われる。「イタリア古写図」をはじめモレイラ系諸図ではこれを正しく示しており、ティシェイラ系諸図とこれらを区分する指標の一つとなっている。

以上の①②③は基図となった行基図の違いによるティシェイラ系とモレイラ系の相違点であるが、これから見ても両者の相違点で基図としての行基図の違いに由来するところはむしろ少なく、両者の図形はさらに大きな点で異なっている。すでに前稿で指摘した点も合せ、次にこれを列挙する。

- ① モレイラ系は本州東北部がティシェイラ系に比して北方へ大きく弯曲している。
- ② 四国の形状がモレイラ系では楕円状あるいは肉太のレンズ状であるのに対し、ティシェイラ系ではドラード型の形状を襲い長方形である。

③ モレイラ系では琵琶湖・淀川水系が大坂湾の延長部分のごとく大きく内陸に流入しているが、ティシェイラ系では琵琶湖は小さな円形で、また淀川は細い線で描かれ、その河口も誤って堺の南方に示されている。

④ モレイラ系ではエゾ地を比較的大きく描いているが、ティシェイラ系ではこれを描かない。

モレイラ系諸図における上記の特徴がいづこに由来するものかを明らかにすることは極めてむづかしく、②に関してはあるいは基図となった行基図の形状を襲うものとも考えられるが、①③④についてはモレイラ自身の描写に由来する可能性が大きいものと考ええる。以下しばらくこの点について検討しよう。

まず①についてはワリニャーニが、その著『日本諸事要録補遺』⁽⁵⁾においてモレイラの名を示して言及しており問題はない。

③について岡本良知氏は「モレイラの日本図こそは、彼の実測による最初の淀川筋の構図である」⁽⁶⁾と流路の描写に関しモレイラ起源を認めているが「原図者モレイラにしても、第一次の模写をしたイエズス会士にしても、また屏風にそれを写した日本の画家にしても、淀川を幅のある入海として描くわけがなかったはずである」⁽⁷⁾とする。しかし筆者は「イタリア古写図」の淀川の描写の方がより率直にこの地の実見した印象を表現しているように思われる。いうまでもなく当時の淀川は現在より幅広い水域をもっていた。このことは巨椋池の存在一つをとってみても容易に理解できよう。

④に関連して想起されることはモレイラが日本図とは別にエゾ地の図を描いた事実であり、これについてはすでにシリング、児玉・高倉・工藤、チースリク、岡本の諸賢が述べているところである。⁽⁸⁾しからばモレイラは何によつてエゾ地を描いたのであろうか。彼自身が彼の地を訪れた証はなく、またヨーロッパ人が自からエゾ地を訪れた

のは、エゾ地とともにモレイラ系に属すると思われる日本を描いたジェロニモ・アンジェリスで一六一八年のことである。しかし、モレイラ在日当時、本州の北方にエゾ地の存することが知られていたばかりでなく、すでに一五世紀にその南部が安東氏や蛎崎氏に領有され、しかも蛎崎慶広はモレイラ在日中に都で秀吉に謁した事実のあることは上記諸賢の主張するごとく、モレイラと蛎崎氏の関係者との接触の可能性を大きく暗示するものである。

モレイラのエゾ図は日本図と同様失われてしまったが、その姿をうかがわしめるものが児玉・高倉・工藤諸氏の示したニコライの書 (Nicolai, Elivd: Neue und Warhafte Relation ..., München, 1619) とこれに所載の両半球世界図 (ヘッセル・ヘリッツゾーン Hessel Gerrisz. の両半球図一六一二を改訂増補したもの) である (以下ニコライ図と略記⁹⁾)。ニコライの書のエゾ地に関する記述や両半球図の内容がモレイラによるものと推察されるイエズス会文書『エゾ人の島』の記述と一致することがその論拠となっている。

しかし岡本良知氏は、「これについてはニコライが「蝦夷人の島」の通りに、大陸や島々などを作図したというエリウット (即ちニコライ引用者注) の地図によって、モレイラの作った「蝦夷人の島」の原図が、どの程度に復元せられているかを確かめ難い」という慎重論を示している。

これに対し相原良一氏は、ニコライ図の西半球に描かれたエゾ島の東端を岡本氏が本州の最北部と誤認したとし、この図のエゾ島とそれ以北、即ち「アイノモソテイ」や「レブンクル」、アメリカとアジアの両大陸を連続させた描写がモレイラを原拠とするものであることを積極的に主張した。¹⁰⁾

これに関し筆者は、エゾ地周辺のみならず日本諸島全域の描写においてもニコライ図にモレイラ系諸図と共通する特徴の認められることを次の諸点から主張したい。

① 本州の東北部が東北―西南走し、北緯三十八度以北に及んでいること。この特徴は少くともこの日本図の原拠がティシェイラ系ではないことを明示している。

② 能登半島の突出と、これと奥羽地方との間に抱かれた内湾の描写が顯著に認められること。この内湾はティシェイラ系諸図においても認められるが、本州東北部が余り北上していないティシェイラ系ではその湾入の度合がモレイラ系における程顯著には認められない。

③ 四国の形状がティシェイラ系の長方形よりもむしろモレイラ系の特徴である楕円形に近いこと。

他方、ニコライ図における関東から紀伊半島にかけての海岸線の描写や九州の形状は、小縮尺図のため明らかではないが、ティシェイラ系ともモレイラ系とも異なり、海岸線の出入が少なく、むしろマルチャーニの日本図（ヨハン・ブラウ『アトラス・シネンシス』一六五五所収）のそれに類似している。マルチャーニ図は先に示したニコライ図の特徴①―③をも示しており、ニコライ図はマルチャーニ系の先駆との疑いも生ずるが、東海地方の海岸線の出入の少ないマルチャーニ図の描写はすでに中村 拓氏が指摘したごとく、一六四九―五〇年⁽¹¹⁾に訪日したオランダ人使節アンドレ・フリシウス一行の所謂『江戸参府道中図』によるものである（この図は有名なモンタヌスの『東インド会社遣日使節紀行』一六六九にも見られる）。従ってニコライ図の原拠がこの図であり得る訳はない。筆者は現在のところニコライ図の東海・九州地方の海岸線の描写もモレイラ系のそれを極端に縮小、簡略化した結果生じたものと考えている。

二

前節で述べた通りニコライ図においてはアジア・アメリカの両大陸が連続し、空想上の所産であったアニアン海峡が消失している。相原氏はこれをモレイラによるものとするが、果してそのように断定することが可能であろうか。本節ではこの問題を中心に若干の考察を試みることにしよう。

北太平洋に関し十六世紀のヨーロッパ人の知るところは極めて少なく、これに関する彼等の地理的観念は極めて漠然としたものにすぎなかった。これにはおよそ次の四通りの考えのあったことを彼等の作成した地図等からうかがうことができる。

① アジア大陸はわが国のはるか西方で終っており、わが国の北方は芒漠とした大洋が広がるだけが、あるいはわずかに本州北方等に銀島等仮空の島々の存在を想定するもの。

② わが国の北方海域において、アジア・アメリカの両大陸が接近し、その両者の間にアニアン海峡の存在を想定するもの。

③ わが国の北方でアジア・アメリカ両大陸が陸続きであると想定するもの

④ わが国の本州や四国がアジア大陸（ある場合には一部アメリカ）に続くものと考えたオーメン型日本図に示された地理的観念。

以上のうち比較的早く消失した④はともかくとして、このような地理的観念は、ヨーロッパ人に北海道の存在が知られ、またさらにフリースの探検航海（一六四三）によりオホーツク海周辺の海域が知られるに至るまで大きな

変容は認められなかったといえる（フリースの報告に基づき刊行された最初の地図はヤンソン J. Jansson の日本図一六五〇）。

ヨーロッパ地図史における近世初頭のこうした一般的状況のもとにあつて十六世紀の末から十七世紀にかけて、わが国北方海域に関する極めて特異なある種の地理的観念をヨーロッパ人の間に見ることができるようになった。その一つは現実の地理的存在としてのエゾ地の確認であり、他の一つはアジア大陸の北東部が東方に延長してエゾ地あるいはエゾ島北方附近に達しているという考えである。⁽¹²⁾ 筆者はこの二つの地理的観念をヨーロッパ人にもたらししたのは日本人のもつ地理的観念であつたと考えており、以下この点について述べることにする。

まずエゾ島に関しては、ヴェーリユ型日本図に見られる空想上の存在である銀島等は別として、前述のアンジェリス図以前、フィレンツェ国立文書館所蔵行基図の本州東方に *Yezoga xima* とあり、この図が天正遣欧使節にかかわるものとの通説を認めるならば一五八〇年頃にはわが国でエゾ地が島であることが認識されていたこと、またこれがヨーロッパに伝えられたことを示している。

筆者がモレイラによるとする「イタリヤ古写図」には残念ながらエゾ地の南端、松前付近を示すのみでエゾ地を島と考えたか否かは明らかでない。しかし前述のイエズス会文書『エゾ人の島』が諸賢の認めるごとくモレイラによるものであるとすれば、モレイラがエゾ地を島であると考えたことは疑いのない事実となる。

即ち、この文書の末尾に「インド副王の使節」とあるのはワリニャーニを指し、「関白のもとへ遣わされたその島（エゾ島―引用者注）のある住民」⁽¹³⁾とは天正十八年二月（一五九一年一月）秀吉に謁見した松前の蛸崎慶広の一行がこれに同行したエゾ人達のことであり、ワリニャーニがインド副王の使節として恐らくモレイラとともに入洛

したのが天正十九年一月（一五九一年二月）であるためこの両者の間に交渉のあった可能性は極めて高く、モレイラが『エゾ人の島』に記された情報を得たのはこの際であつたと推測される。

次にこの文書において先に筆者が提示した第二の点と深くかわるの「レブンクール」という地名である。これに関しチースリク氏の編著では「(Rebunur 札文島か?)」と注が付されている。札文島という地名の由来がレブンクールという言葉にあつたとしても、そもそもレブはアイヌ語のレブ（沖）、レブンは同じくレブン（沖へ行く、沖の）に対応し、レブンクールで沖の人、外来人、外国人を意味する普通名詞であり、必ずしも札文島という特定の場所に限定されるべきものではない。⁽¹⁴⁾

レブンクールは『エゾ人の島』によると「エゾの島の北方にある他の島」とされており、ニコライ図の記載と合致するようでもあるが、また続けて「朝鮮と連らなっていると朝鮮人も言っている」ともあり、レブンクールが大陸に位置する可能性をも示唆している。レブンクールに関するこの相異なる二つの情報の存在は、この名が元来「沖の人」を指す普通名詞であることを一層明瞭に示しているといえよう。

ここではレブンクールが朝鮮に続いているとの情報の存在に注目すべきであろう。それはエゾ地の北方にアジア大陸の東部が及んでいることを示しているからである。しかもこれを朝鮮からの情報としていることは、文禄の役における加藤清正軍の侵略によりもたらされたオランカイに関する情報を想起させる。

オランカイについては岡本良知氏の詳細な研究があり、⁽¹⁵⁾ここは贅言を要しないが、朝鮮東北部に隣接するオランカイがわが国の北方に位置しているという地理的認識が加藤軍によりわが国にもたらされた事実は一応注目して然るべきであろう。

即ち、岡本氏がすでに公にした『清正高麗陣覚書』（下川兵太夫）中の「せいしう、浦江罷越せると、すをとらへ／候事（16）附後藤二郎と申通詞をとらへ申事」に次のような記事がある。

（前略）此後藤と申者は日本松前より獵船に乗、風に放されせいしう、浦へ着候て、廿年計（20）彼所に居申候に付て、おらんかい口をも朝鮮口をも、日本口をも、自由につかい申候、能通詞にて候ゆへ、清正重宝がり候て、則（すなわ）二郎と名を附られ、後藤二郎と申候、せいしう、浦より天氣能時（よきとき）は、富士殊（こと）之外（ほか）近く相見え候、彼所よりは、富士山は未申に当りて見え申候、松前よりは真北にて候ずると存候（後略）

これによると豆満江河口近くに位置する「せいしう浦」（西水羅）が松前の北方にあたるものと考えられている。

また岡本氏によると清正の遺臣古川又玄の『清正記』にも方向についての記載を欠いてはいるが同様の記述があり、また寛文年間に大関定祐の著した『朝鮮征伐記』にも「この瓊翕浦（西水羅―引用者注）という処は、日本の艮に当り、雲晴れ日和の能き時は、駿河の富士山坤に当りて近々と見え渡る。松前より北にて日本の東北なり」とある。

即ち、エゾ地の北方にアジア大陸が及んでいるとの情報、蛸崎慶広の入洛当時にもすでに内地にもたらされているが、文禄元年のこの事件を契機に清正軍により新に内地にもたらされたものと思われる。しかし、後藤二郎は清正軍に捕えられる二十年前松前を出立して漂流、西水羅に至った者であり、この誤認の背景に二十年前松前に居た頃に抱いていた地理的觀念が存在するものと考えれば、この種の地理的觀念が十六世紀における日本人の一部の間に存したものと推測も可能であろう。

このことを傍証する事実の一つとして、シリリング氏や岡本氏により紹介されたランチェロットの報告書を示すことができよう。この報告書はフランシスコ・ザビエルの日本宣教の契機となった鹿児島出身の日本人アンジローの伝えるところを記しているが、そこにはエゾ地に当る地名を^{Gogoo}と記し、中国と日本の下方（即ち北方）に北東に向っている広大な土地だと述べている。シリリング氏はランチェロット自身は^{Ego}と記したが筆写者か刊行者がEをGに誤ったものとして⁽¹⁷⁾いる。

次に清正軍のもたらしたこの種の情報を逸早く地図に示したものとして、有名な秀吉所持の扇面地図は別として、サン・フェリーペ号の海図を筆写した世界図（高知県立図書館蔵）がある。この図については松田毅一博士による研究がある。⁽¹⁸⁾これによるとこの図はサン・フェリーペ号の海図に基づくものとはいえ当時のヨーロッパ人の地理的知識を越える点を示している。そのうち本稿にとつて最も重要な点は朝鮮半島から東へオランカイ→エゾと延びるアジア大陸東北部の図形である。この部分は日本人が筆写の際、サン・フェリーペ号の海図に改変を加えたものと推察される。

他方、この清正軍によりもたらされた情報をヨーロッパ人の著述として早くも記録したのはフロイスの『日本史』であろう。即ち、その三部四十七章に次のような記載がある。⁽¹⁹⁾

以下記述する朝鮮国征服の次第をよりよく理解するためには、（老）関白本人が、かの地から得た情報、ならびにかの地の事情と地勢が印刷されている諸地図に基づき、まず同国の特質、および同国民について知っておく必要があろう。

この朝鮮地方は（中略）三、四カ国と隣接し、西方ではシナ人と接触し、（中略）北部および北東部ではタルター（韃靼）人とオランカイ人（の土地）に接している。

オランカイ人（の土地）は、日本の北部と大きい入江を形成し、蝦夷島の上方で北方に向って延びている突出した陸地である。（オランカイ人は、蝦夷（島民）とも交易している。

この引用文の最後の部分はオランカイがエゾ島民にとってレブンスールの一つであったことを示唆するものと見て注目される。

三

アジア大陸の東北部がわが国の北辺近くにまで及んでいることを示した最も早い人々のうちの一人としてフロイスと同様イエズス会士であるマテオ・リッチをあげることができる。彼は未だ肇慶滞在中に作成した『輿地山海全図』（一五八四）においてはわが国の真北にアニアン海峡に相当する海域を示しているが、南京版の『山海輿地全図』（一六〇〇）においては日本の北方にアジア大陸の東北部が及んでおり、この両者の間に大湾を描いている。次で彼の作成した地図としては最も著名な『坤輿万国全図』（一六〇二）にあっては本州北端とアジア大陸との間に北陸道と誤記されたエゾ島に当る大島が明示されている（ただしエゾ地を示すと思われる「野作」という地名は大陸側に記されている）。

この改変がいかなる理由でなされたかが次に解明すべき問題となる。ともかく彼は一五八四—一六〇〇年の間にア

ジア東北部の地理に関する新情報に接したものと考えられるが、この間に文禄の役の惹起していることは事実である。従ってこれにより得られた情報がリッチのもとに及んだ可能性も一応は考えられるが、問題はそう簡単ではない。ちなみに文禄の役前後のリッチの動向を示すと次のごとくである。⁽²⁰⁾

○一五九二年二月二十日―二十八日頃(四十一歳) 南雄に至る。同七月韶州寓所を匪賊に襲われ片足を負傷。同十一月十五日―十二月十五日頃肇慶、十二月十五日―三十一日マカオへ行く。

○一五九三年二月十五日(四十二歳) マカオから韶州へ帰る。

このリッチのマカオ旅行は日本からインドへ帰るワリニャーニの一行(これにはモレイラも同行)と会見するためであった。この旅行について岡本氏は「彼(リッチ)は足を負傷していたので、その治療をも兼ねてマカオへ来たために、滞在中に十分な暇もなかった故か、あるいはまた日本のことには関心をもたなかった故かわからないが、モレイラの日本で作った日本図や「蝦夷人の島」の図のことなどを、ヴァリニャーノや日本から同行した人びとより聞知したらしい形跡がない」と述べている。⁽²¹⁾

しかし、筆者は、この際にわが国の北方にアジア大陸が近接しているという新しい情報を彼が得たものと考え、ただし清正軍の京城帰着は文禄二年(一五九三)になつてのことであり、これ以前に後藤二郎による情報が内地へ伝わったとしても、その前年十月に長崎を出帆したワリニャーニの一行の耳にこれが達する可能性は皆無とはいえないが極めて小さいといわざるを得ない。

従ってリッチ図における件の改変は、モレイラが蛸崎慶広一行との接触交渉によつて得た情報による可能性が大きいものと思われ、ニコライ図のアジア・アメリカ両大陸の連続がモレイラによるとの説に疑問の生ずるところで

ある。そもそもこのような描写はすでに十六世紀の前半から時折見られ（例えばガスタルデイ図やフォルラーニ図等）、現に世紀末のファウスト・ルゲーシの両半球図（一五九七）にも描かれ、別段新しい図形とはいえない⁽²²⁾。これに対してアジア大陸がわが国の北辺に接近する図形は十六世紀末になり地図史の上に始めて登場してきたものである。

最後にアジア東北部に関するこの種の新情報がいエズス会士と深くかかわりのあることを示す例証の一つとしてブリュッセル王立図書館所蔵マニエル・ゴディーニユ・デ・エレディア著『マラッカ・南インド及びカタイについての記述』（一六二三）所収の諸図の存在することを指摘しておこう。⁽²³⁾

むすび

以上、十六世紀後半期にヨーロッパ人が作成した地図における日本近辺の描写に、わが国の人々の抱いていた地理観がいかなる影響を与えたかについて若干の考察をおこなった。諸々の事情から論じ尽せなかった点、掲載すべきでありながら省略した図版・文献等多いが大方の寛恕を請う次第である。

一九八五年九月五日擲筆

注

- (1) 海野一隆『西洋地図学史におけるガスタルデイ型日本の登場』『地域—その文化と自然』福武書店 一九八二年。
- (2) Crinò, S.: *La prima carta corografica inedita del Giappone portata in Italia nel 1585……*, *Revisita Marittima*, Anno LXIV, N. XII, 1931.
- (3) 芦田伊人『西欧最初出版の日本地図に就いての或る考察』歴史地理 第五十六巻第四号 一九三〇年。

- (4) 他にカルデイン、ジンナロ、ブリエ、サンソン、ダッドレー等の同型図をいうが、前稿で最後者を「ポルトラノ風」としたのは(二十六頁)地名が海岸線近くに限られた様子を述べたまででこの図がメルカトル図法を採っていることはいうまでもない。「ポルトラノ風」という表現は誤解を招くため「海図風」に改めたい。
 - (5) 松田毅一・佐久間正・近松洋男訳『日本巡察記』平凡社 一九七三年、一六一頁。
 - (6) 岡本良知『十六世紀における日本地図の発達』八木書店 一九七三年 一九六頁注六六。
 - (7) 前掲注(6) 一九六頁 注六七。
 - (8) 前掲注(6) 一〇九—一六頁。児玉作左衛門・高倉新一郎・工藤長平「蝦夷に関する耶蘇会士の報告」『北方文化研究報告 第九輯 一九五四年。チースリク編『北方探検記—元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書—』吉川弘文館 一九六二年 四三—四五頁。
 - (9) 前掲注(6) 一一六頁 注六七。
 - (10) 相原良一「日本地図の発達に及ぼしたイナツシオ・モレイラの影響を示す両半球世界図」『横浜市立大学論叢人文科学系列第二十六巻第三号 一九七五年。Aihara, R.: Ignacio Moreira's Cartographical Activities in Japan (1590-2), with Special Reference to Hessel Gerritsz's Hemispheric World Map, The Memories of the Togo Bunke, 34, 1976.
 - (11) 中村 拓『御朱印船航海図』日本学術振興会 一九六五年 四二四—四二六頁。
 - (12) 早くメルカトル型日本図にこの種の図形が見られるが、これではわが国と大陸の間の海域をプトレマイオスの *Magnus Sinus* (大湾) とする等プトレマイオスの影響が強く認められるため一応これを除外した。
 - (13) この文書は前掲注(9) チースリク氏の編著(二〇六頁)によった。
 - (14) アイヌ語に関しては知里真志保『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター 一九八四年(復刻版)によった(二〇七—一〇八頁)。
 - (15) 前掲注(6) 第五章第一節。
 - (16) 岡本良知『豊臣秀吉—南蛮人の記録による—』中央公論社 一九六三年 一一二—一二頁。
 - (17) 前掲注(6) 一一一—一二頁。
 - (18) 松田毅一『キリシタン研究 第一部 四国篇』創元社 一九五七年。
- 同『太閤と外交—秀吉晩年の風貌』桃源社 一九六六年(同『秀吉の南蛮外交—サン・フェリーペ号事件』新人物往来社

一九七二年。

- (19) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』中央公論社 第二卷二十六章 一一二頁。
- (20) 方豪「利瑪竇年譜 訳 方豪六十自定稿」『利瑪竇研究論集』崇文書店 一九七一年。
- (21) 前掲注(6) 一一三三頁。
- (22) Shirley, R. W.: *The Mapping of the World; Early Printed World Maps 1472-1700*, London, 1983. Pl.63(Anon. Nurenberg, c.1535), Pl.72(G. Gastaldi, 1546), Pl.84(G. Calapoda-Anon. Venice? c.1555), Pl.86(G. Gastaldi-G. de Jode, Antwerp, 1555), Pl.99(P. Forlani, Venice, 1565), Pl.106(C. Vopell-B. van den Putte, Antwerp, 1570), Pl.107(B. Arias, Antwerp, 1571[1572]), Pl.127(G. Franco, Venice? 1586-87?), Pl.142(J. Myritius, Ingolstadt, 1590), Pl.164(F. Rughesi, Rome, 1597), etc.
- (23) 前掲注(6) 附録一第二節。

(文学部助教授)